



特別編

九州の逸品

KYUSYU NO IPPIN

FILE No.43



九州の「地域ブランド」を  
ご紹介致します。

福岡

はか  
た  
おり

博  
多  
織

糸

今年、博多織は製法伝来  
777周年を迎えました。今回  
は、博多織の歴史や特徴につい  
て紹介すると共に、博多織のネ  
クタイ、財布など様々な商品開  
発をしている「株式会社 サヌイ  
織物」の3代目社長・讀井勝彦  
氏にお話をお伺いしました。



## ◆ 777年の 伝統ある織物

今年、製法伝来から777年という記念すべき年を迎えた博多織。先染めの糸を使って細い経糸を多く用い、太い緯糸を箠で強く打ち込み、主に経糸を浮かせて柄を織り出すのが特徴です。

生地に厚みや張りがあり、締めたら緩まないということ、古くは重い刀を腰に差す武士の帯として重用されました。



## ◆ 格式ある献上柄

博多織を代表する紋様である献上柄は、江戸時代に黒田長政が幕府に博多織を献上したことに由来します。

仏具の「独鉗」と「華皿」との結合と中間に縞を配した紋様は、博多織の始祖・満田彌三右衛門が考案したと言われ、現在でも博多織製品に多く織り出されています。また「博多」を象徴する柄として、福岡市営地下鉄の博多駅のシンボルマークなど、福岡市内のあちこちで目にすることができます。

## ◆ 博多織の始まり

博多織の歴史は、鎌倉時代の1235年（嘉禎元年）、博多商人の満田彌三右衛門が、圓爾弁圓（後に聖一國師）と共に宋へ向け博多を出発したことに端を発します。宋に6年間滞在した彌三右衛門は、織物、朱、箔、素麺、

麝香丸の5つの製法を修得し、1241年（仁治2年）に博多に帰ります。

彌三右衛門は、これらの製法を人々に伝えましたが、織物の技法だけは家伝とし、独自の技術を加え、広東織と称していました。さらに250年ほど後、満田彌三右衛門の子孫、満田彦三郎が明に渡り、織物の技法を研究。竹若藤兵衛と工法の改良を重ね、琥珀織のように生地が厚く、模様は浮きでた厚地

の織物を作り出しました。

竹若藤兵衛が織り出した織物は広東織からヒントを得たもので、地質が非常に硬いので、反物としてより、帯として使われることの方が多く、寸法や規格を創製しました。

これが博多帯の始まりであり、その織物は博多の地名をとって、「覇家台織」と名付けられたと伝えられています。今から480年ほど前のことです。



上.博多織の始祖・満田彌三右衛門／下.筑前福岡藩初代藩主・黒田長政



左:わかシリーズ(写真はポーチ)。他にもパスケースや名刺入れ、小銭入れなどを展開/右、「サスイ織物」の豊富な商品ラインナップ

### ◆ 献上品としての博多織

1600年(慶長5年)、黒田長政が筑前を領するようになり、徳川幕府へ博多織を献上します。この品々を総称して「定格献上」と名付け、博多織元に「織屋株」と称する特権を与え、保護という名の統制のもとで、藩からの需要のみを生産させ、献上の風格と希少価値を厳重に保護していきます。

博多織は高級織物として知られるようになりましたが、需要に応えることができず、西陣や桐生、米沢などで「模造博多織」がかなり出回るようになります。

江戸幕府の崩壊後、藩に保護されていた博多織も自由に生産され、1885年(明治18年)にはジャカード機が導入されました。

同年、松居織工場が袋帯を発売。1897年(明治30年)には240軒の博多織屋が存在していました。

### ◆ 戦前から現代までの博多織

1904年(明治37年)以降は日露戦争を境に経済は活気を失い、さらに1942年(昭和17年)企業整備令により残存した業者は31名となつてしまいます。戦後(昭和30年頃から)、経済復興の中で徐々に着物がブームとなり業者数、生産数も増加。1975年(昭和50年)のピーク時には168軒、帯で約200万本の生産数を誇り、1976年(昭和51年)には国の伝統的工芸品に指定されました。

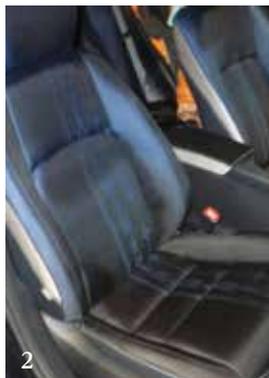
現在は、ほとんどの博多織製品は機械織で製造されていますが、コンピュータなどの電子機器も発達し、スピードや繊細さも一昔前では考えられなかった新しい織物が開発されています。

### ◆ 「サスイ織物」の

#### 社長が語る博多織

「博多織」というと帯や着物の

### ◀◀◀ 「サスイ織物」の製作実績





左.献上柄長財布。収納力があり、使いやすいと好評／右.斜献上ネクタイ。献上柄を斜めに配し、地模様の入ったデザイン

イメージが強いですが、最近ではネクタイや財布など様々な商品が開発されています。中でも、博多織の小物やギフト製品に力を入れているのが、福岡市西区小戸に博多織の工房を構える「株式会社サヌイ織物」です。今回は、3代目社長・讚井勝彦氏にお話を伺いました。

### ◆異色の博多織メーカー

我が社の創業は、1949年（昭和24年）です。同業他社と違うのは「博多帯や着物を一切つくらない」という点です。創業者である祖父・勝雄の代までは問屋さん



讚井社長

からの注文で帯や着物を織っていましたが、1964年（昭和39年）に父・勝美が2代目社長を引き継いだのをきっかけに、帯の生産をやめ、小物といわれるギフト製品に力を入れるようになりました。当時は和装ブームでしたので、問屋さんからの注文がひっきりなしで、それを織るだけで食べていけたのですが、父は「問屋から言われたものを織るだけではつまらない」「自分の織りたいものを織る」といつて下請けをやめてしまいました。受注がたくさんある中で、売り上げの大半を占める帯の生産をやめてしまうのは大変な決断であったと思います。

幸いにも当時は山陽新幹線が博多に開通した時代でしたので、おみやげに博多織の小物を買求めるお客様が多く、お店から「商品はあるだけ持って来てください」と言われる程に仕事は順調だったそうです。

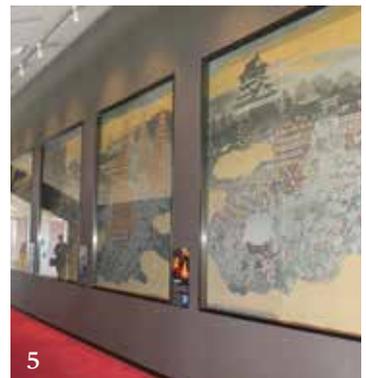
- 1.福岡国際会議場の緞帳／2.トヨタ自動車九州 レクサスCT200h オリジナルカスタマイズカー「輝匠」シート及び内装／3.ミスアース福岡の博多織サッシュ(タスキ)／4.ユーモデザイン印鑑ケース／5.福岡県新庁舎展望室「福岡五大祭り」タペストリー／6.VANS (ABCマート)特別企画の博多織×VANSシューズ／7.フィギュアスケートグランプリファイナル2013福岡のメダルリボン



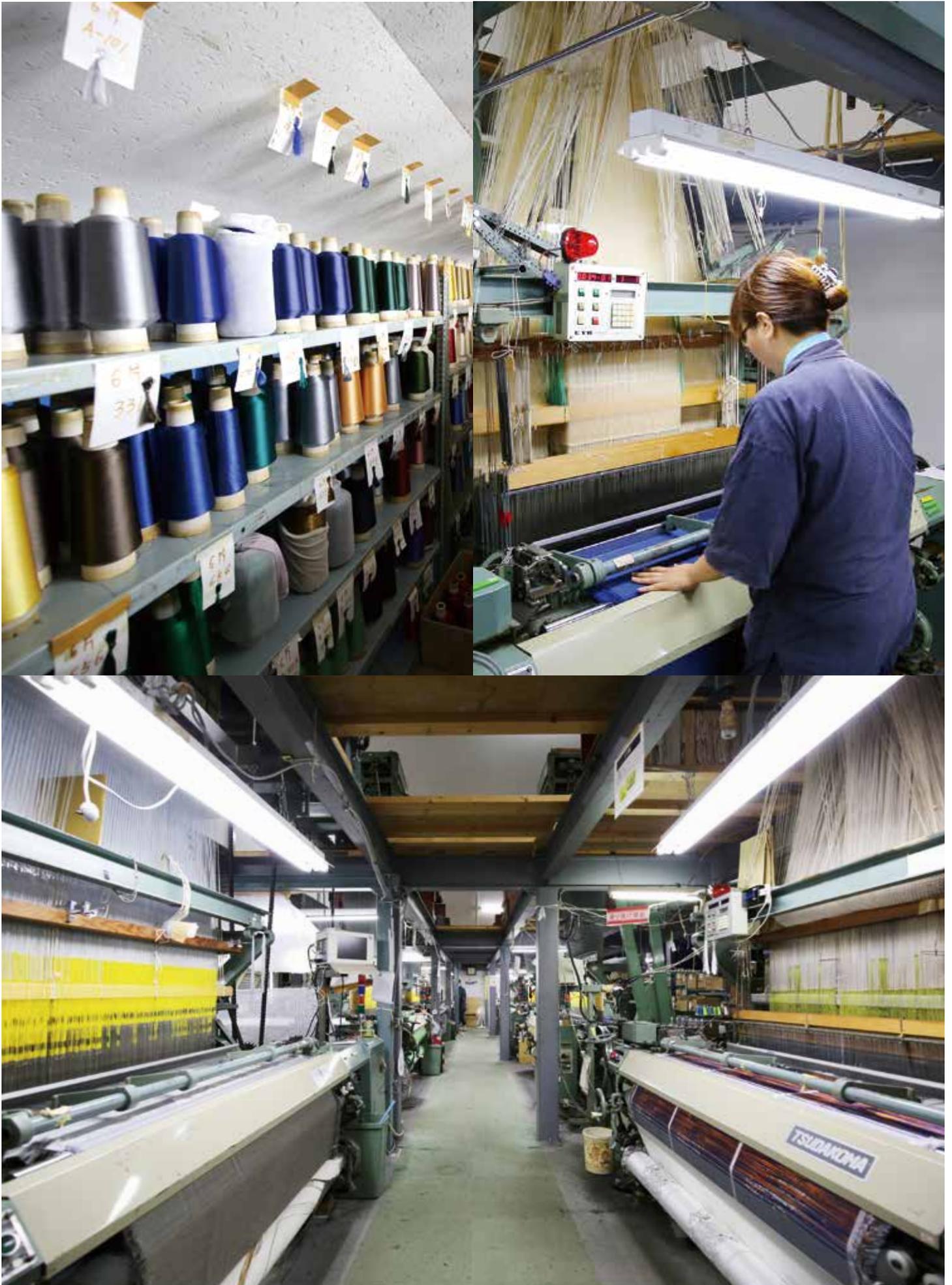
7



6



5



左上.材料となる絹糸/右上.職人が機械の前に立ち、仕上がりに目を光らせる/下.機械織の工房

## ◆ 3代目社長に就任

私が社長を継いだのは、2009年(平成21年)、リーマンショックの後で軒並み日本経済が落ち込んでいた頃でした。我が社もその影響を受け、売り上げがかなり落ちました。

業績が低迷する中で、徹底的に業務の無駄を省いたところ、同じ人員と業務で業績はV字回復することができました。

社長に就いてから「福岡の伝統工芸品である博多織を、地元福岡で目にする機会を増やしたい」と博多織の施設「博多織工芸館」を開設しました。博多織の貴重な資料を展示したスペースや、製造工程を見学できる工房、直売所などを併設しています。博多織を身近に感じられる施設になっており、お客様からも好評です。

## ◆ 革新の積み重ねが伝統をつくる

我が社では、博多織の財布や名刺入れ、ネクタイなど、さまざまな博多織商品を開発しています。日常的に着物を着る機会が減っていく中で、伝統的工芸品である博多織の良さをより多くの人に知ってもらいたいと思います。

博多織は今年で777周年を迎えます。私は、伝統とは革新の連続のうえに成り立っていると考えています。先人たちは常に新しい考えや技術を取り入れ、開発、工夫や改良、発明を繰り返し、最高峰と呼ばれる織物を生み出してきました。革新の積み重ねこそが伝統をつくるのです。

これからも、伝統を継承しつつ、新しい博多織を創造してまいります。

## 博多織工芸館 (株式会社 サヌイ織物)

- 住所：福岡市西区小戸3-51-22
- 電話：092-883-7077
- 営業時間：10:00~17:00
- 定休日：なし(年末年始・お盆除く)
- 入館料：見学無料
- 交通：
  - 車：福岡都市高速姪浜ランプより約5分(駐車場あり)
  - 地下鉄：姪浜駅よりタクシーで約5分/徒歩約20分  
西鉄バス507番で「車両基地前」下車 徒歩約5分
  - JR：下山門駅よりタクシーで約3分/徒歩約15分
- 公式サイト：<http://sanui-orimono.co.jp/>

